

日本語と韓国語における事柄情報と その言語化の傾向について

尹 盛熙*

Encoding States of Affairs in Japanese and Korean

Sunghee YOUN

要旨：本稿では、日本語と韓国語の相違点と類似点を追求するにあたり、同一の事柄に対する両言語の言語化方式でどのような違いが見られるか、それに関わる文法的手段にはどのようなものがあるかを概略的に紹介する。世界は複雑な連続体であるが、我々はそれを恣意的に分節することによって複数の離散的要素が結合したものとして認識する。その中で際立つ要素を中心に、特定の事柄について述べるというのが基本的なやり方である。中心となるのは、事柄の参与者である「モノ」と行為・動作などの具体的な中身である「コト」で、典型的には名詞と動詞に言語化されるが、これがすべての言語で常に共通するわけではない。また参与者とその行為に関わる様々な付帯情報をどこに紐づけて表現するのかわかでも、形態統語的な多様性が展開される。さらにある表現方式が共有されていても、どちらをより好んで使うかという選好の問題もあり、両言語の言語化戦略に違いをもたらす。

Abstract:

This paper provides a brief overview of some important questions in a contrastive study exploring similarities and differences between Japanese and Korean, especially in terms of how messages are encoded into linguistic expression, and of what kind of grammatical devices are utilized in the two languages. The world, a non-segmental body of myriad states of affairs, can be described in language only by breaking it into a compositional set of discrete elements. Considerably salient are ‘entities’, various players participating in an occurrence, and ‘events’, informational contents of certain action, state, or change of state, etc. It is widely understood that entities are typically encoded as nouns, and events as verbs, which does not hold for every case in all languages, including Japanese and Korean. In addition, various types of information other than entities and events can be represented in diverse forms, manifesting morphosyntactic differences between the two languages. Further, each language differs in its preference for not only its construal of a single occurrence but also for the way of encoding, and the grammatical devices underlying it.

キーワード：事柄情報、情報の言語化、名詞と動詞、日韓対照

*関西学院大学国際学部教授

1. はじめに

本稿の目的は、日本語と韓国語という個別言語間の相違点と類似点を追求するにあたり、同一の事柄に対する両言語の言語化方式でどのような違いが見られるか、それに関わる文法的手段にはどのようなものがあるかを概略的に紹介することである。

我々の周りでは、無数の物体や生き物などの個体が様々な出来事に関わりながら「世界」というものを成しているが、人間はそれをありのままの全体として認識することができないため、それを恣意的に分節することによってあたかも複数の離散的要素が結合したものであるかのようにとらえる。何らかの出来事について述べる際は、それらに関わる様々な要素の中で特に際立つものを中心として語や句などのことばを当て、文を組み立てる、というのが基本的な言語の使い方である。当然ながらすべての構成要素をことばで表現することはできないので、そこには必然的に取捨選択が発生することになる。しかし人間が恣意的にやっていることだから、どのように切り分けるか、何を取り立てるかにおいてやり方が一致するとは限らない。さらにそれをことばにすると、一つの言語内でも数通りの選択肢が存在するし、言語が変われば、同じ出来事を語る言い方も変わるようになる。

日本語と韓国語という構造的に類似した言語であっても、語・句・文という言語単位の各レベルでの組み立て方、そしてコミュニケーションの取り方などにおいて様々な違いが見られる。以下では、まずことばで何かを表現する際の基本的な仕組みや、諸言語間で違いが生まれる必然性などを確認した上で、特に日韓の間で主要な論点となってきた現象を中心に具体的な例を言及しながら、その概略を紹介する。

2. 問題の背景

言語によるコミュニケーションの基本的な目的を何らかの情報伝達と考えた場合、やりとりされる情報とは基本的に「事柄（出来事）」に関するものになる。単純に言えば「～が（～を）～する」

という形でとらえられる動作や行為などが土台であり、さらに関連する詳細を加えたりしてその出来事を「語る」ことになる。

そもそも事柄とは、様々な人間や生物、事物が絡み合い、影響したり影響されたりする複雑な連続体のようなもので、その間に「0か1か」のように明確な境界線が常に存在するわけではないので、人間が特定の事物や事柄を認識するためには、任意に切れ目を入れて区切るしかない。言語に限らず、あたかも事柄をありのままにとらえているかのように見える写真や動画もまた同じである。ある出来事が起きている最中にその場面をカメラに収めるのは、時間の流れの中でその一部だけを人間の都合に合わせて切り取っていることになるからである。

人間が恣意的にやっていることだから正解があるわけでもなく、分節の仕方や言語化の仕方は、個別の話者や集団、文化圏によって必然的に分かれることになる。例えば自然現象である虹の色は日本語では「7色」と言われるが、それぞれの色の区間に境界線が存在するわけではなく、「何色に分けるか」が言語・文化圏によって異なることはよく知られている。虹に限らず、あらゆる事物や事柄を認識する際の切り分け方がいく通りかに分かれうるのは必至であり、場合によってはそれがコミュニケーションの上で問題や衝突を引き起こすこともある。

Pinker (2007) は、「事柄」に対する認識が人間によって恣意的に行われるものであることを説明する際に9/11テロ事件と関連した法的紛争の例を挙げている。2001年にアメリカで起きた一連の爆破テロ事件は、「アメリカ同時多発テロ事件」という名称で知られていて、「単一」の事件のようにもとらえられるが、何を基準にするかによっては「複数」の出来事の集まりとして認識することも可能である。もちろんどちらも可能な解釈で、どちらが正しくてどちらが間違っているというものでもないが、「このテロで起きた出来事はいくつか」をめぐって論争になったのは、その事件で保険会社が支給する補償額を決める際だった。事件前、世界貿易センタービルに対しては35億ドルの保険がかけられていたもので、その額

が損害補償として被保険者に支払われるはずだったが、そのビルを長期レンタルしていた事業者（被保険者）は、補償額はその2倍である70億ドルになるべきだと主張した。9月11日当日、ツインタワーの二つのビルは2台の飛行機に15分の間隔を置いて順次に衝突・爆破されたため、「補償の対象となる出来事は2件あった」という理屈だったという。35億ドルか70億ドルか、「出来事」という語のとらえ方で左右されることにしては、かなり振り幅の大きい話である。

さらに、事物や事柄に対する認識が異なるという以上に話は複雑である。認識に合わせてことばを充てるだけでなく、反対にことばで認識が形作られるというのも可能だからである。例えば「真実」「電気」などは目に見えるわけでも、手で触れられるわけでもないが、人間はそれに名詞としての形を与えることによってあたかも何らかの「もの」であるかのように認識する（Lyons 1968）。つまり事柄の経験は言語形式に合わせた形で存在するのではなく、どのような視点をとるか、また個別言語の中でどのような装置を用いるかなどのフィルターを通して言語化されるのである（Berman & Slobin 1994）。

何らかの事柄をことばで述べる時、考えるべき問題はだいたい次の二つにまとめられる。一つは、どのような情報を言語化するのかという選択の問題と、もう一つはその情報を実際に言語化するにはどんな手段を用いるか、である。言い換えれば、抽象的な連続体である事柄の中から言語化する要素としてどれを選び、どのような形式を充てて全体を組み立てるか、ということである。

特に言語類型的に有意義な質問は、どの情報をどのような形で言語化するかにおいて諸言語間にどのような違いが見られるか、というものであり、様々な現象において個別言語が示す多様な振舞いには従来から注目が集められてきた。例えば移動という事柄を言語化する際に「経路」の情報をどのように組み込むかという語彙化パターンに関する類型論的分析（Talmy 1985, 2000）、それに基づいて移動における様態や経路、ランドマー

クなどの付帯情報をどのように組み込むか、その違いが言語におけるナラティブ構成にどのような多様性をもたらすかを分析した Slobin（2004）などが知られる。

さらに言語化された形式に対しては、「文法的に適格かどうか」とは別に、言語形式の様々なレベルで話者に好まれる習慣的な傾向が存在することも指摘されてきた。例えば英語と日本語の対照分析で見いだされた「する」型／「なる」型言語の区分（池上 1983）や「主観的把握」／「客観的把握」の区分（Ikegami 2015）においては、英語と日本語の話者の間で同じ事柄に対するとらえ方及びその言語化形式において、より好まれるものがあることが示されている。

文法構造の面で多くの共通点を有する日本語と韓国語の間でも、表現方式において特定の傾向が見られることが指摘されてきた。日本語の場合、文を構成する際に名詞構造を中心とする「名詞志向」が、韓国語は動詞構造を中心とする「動詞志向」が見られる（金 2003）とされるが、特に典型的に動詞として実現する述語の位置においても、日本語の場合は名詞構造への志向が韓国語に比べて強く表れることは興味深い事実である（堀江 2009）。

文や発話を構築する上でこのような「選好（preference）」の傾向は、該当言語における「自然さ」という考え方、つまり「より〇〇語らしい言い回し」ともつながるもので、その好みに沿っていない表現はたとえ文法的に間違っていないとしてもどこか不自然に感じられるものになってしまう。自分の母語以外の言語を学ぶ経験をしていれば、「なんだか言い回しの感じが違う」という感覚を覚えたことがあるだろう。翻訳作品などで読者に違和感を与えるいわゆる「翻訳調」は、目標言語における選好を考慮せず起点言語の表現構造を訳出に持ち込むときにしばしば起こる現象なのである。

1) 結局この主張は数回の関連裁判で却下された。

3. 事柄情報とその言語化

3.1. 4つの基本情報について

事柄を言語化する際、いくつかの際立つ要素の中からどれを中心軸とするか、でおおよその形式(=句、文など)の形が決まるが、以下では言語化の対象になる情報にどのような種類があるか、大きく4つに分けて説明する。

まず中心軸となるものは、典型的には事柄に参加する個体としての事物と、何らかの動きの2つである。本稿ではそれぞれ「モノ」と「コト」と呼ぶことにする。

- (1) 学生がキャンパスでイヌを散歩させていた
- (2) a. 学生、キャンパス、イヌ、散歩する
b. ～が、～で、～を、～させ～、～てい～、～た

例えば(1)の文で示された事柄は、(2a)に示された要素が中心となっているが、事柄に参加するプレイヤーとして認識される「学生」「イヌ」、そして出来事が起きた場所である「キャンパス」などはモノに当たり、その場所で行っていた「散歩する」という行為はコトに該当する情報である。

さらにモノとコト以外にも、それらに関連する様々な詳細情報が存在するが、これには大きく分けて2種類がある。モノとコトの中身に応じた様々な「付帯情報」と、モノとコト、詳細情報などが事柄の中でお互いにどう関わるのかを示す抽象的な「関係情報」である。

モノとコトに関連する付帯情報では、まずモノの属性などが代表的なものである。(1)では、例えば「学生」に対して「制服姿の」で具体的な装いなどを示す情報を足したり、「イヌ」に対して「大きい」などを足すことができるだろう。他にも個体の数(「2人」「3匹」)などがモノ関連の付帯情報として挙げられる。

コトに関連する付帯情報も多様である。まず行為や動作を「どのような様子で行うか」という様態の情報が考えられるが、コトが何らかの「変

化」に当たるのであれば、変化前と変化後の状態も付帯情報として加えられることになる。特にモノの位置が変化する「移動」の場合であれば、「起点」と「着点」、移動の際にどのような「経路」をたどるのかもまた、言語化の対象となりうる情報である。例えば(1)の事柄の後に、「学生が急ぎ足で正門を出て駅に向かった」という事柄が続くのであれば、「急ぎ足で」は様態、「正門」は「出る」行為の際にたどる経路、「駅」は「向かう」行為の行きつく場所(着点)となる。

続いて抽象的な関係情報とは、何かのモノが事柄の中でどのような立ち位置にあるか、また事柄がいつ、どのくらいの時間幅で起きるのかなどである。(1)で「学生」というプレイヤーは「散歩を主導する」という立ち位置にあり、「イヌ」は「散歩の対象」であるが、このように事柄の上での役割も、事柄を構成する情報となる。また「散歩」という行為がある程度の時間幅を持って「行われている」という事実が「過去にあった」ことなど、時間との関わり方は言語化において主要な要素とされる情報である。

3.2. 言語化の装置と言語の個別性について

前節では事柄を構成する情報をモノ、コト、付帯情報、そして関係情報の4つに分けて紹介したが、本節ではこれらが言語化する際にどのような言い回しがどのような仕組みで用いられるか、それがどのように言語の多様性をもたらすのかなど、より形式的な側面に集中して話を進める。

まずモノとコトはそれぞれ「名詞」と「動詞」と呼ばれる品詞カテゴリーに言語化されることが知られている。まず「モノ」に関しては、「学生」「イヌ」「キャンパス」などのように目に見える具体的な人間や生命体、事物、場所などが代表的な例である。そして「考え」「真実」「友情」などの抽象的な概念を表すものも形態的には名詞に属するもので、これらは文を組み立てる際に主語や目的語の位置に立てるといふ振る舞いを示す。一方「コト」は、何らかの動きや行為、移動、変化、状態などの具体的な内容を指すもので、「踊る」「寝る」「出発する」「壊す」「いる/ある」などの動詞として実現するのが典型的である²⁾。動詞に

においては、事柄が時間軸の上で展開されるものであるという点で、基本的に時間の流れとは関係ない性質 (time-stability) をもつ名詞とは区分される。

もちろんこれは絶対的な法則というよりおおよその傾向で、言語間で必ず一致するというものではない。特にコトの言語化の場合、動詞を用いるのが典型的ではあるが、名詞形を充てることも可能である。例えば日本語で「新しい戦略について様々な側面からじっくり考える」ことを宣言する場合、「検討する」という動詞形を用いれば「これから新戦略を検討するぞ」などのような動詞述語文として表現できるし、「検討」という名詞形を用いれば「これから新戦略の検討だ」という名詞述語文の形式として表現できる。

モノとコト以外にも様々な付帯情報をどのような形式で組み込むかも一様ではなく、大まかには主軸である2つのうちどちらに紐づけるかで分かれる。内容的にモノにより深く関連するものと、コトにより深く関連するもの、そのいずれにも関連するものがあると考えられるが、これもとらえ方によって様々な選択の余地が出そうである。日本語の場合、付帯情報をモノに関連づける場合は名詞に対する「連体修飾」として、コトに関連付ける場合は動詞の「連用修飾」として言語化するのが典型的である。

そして関係情報が言語化する手段としては、日本語の場合、(2b) の「が」「を」「で」を含め、「は」「に」「から」「まで」など、名詞（またはそれ相当の形式）につく各種助詞、そして「～た」「～てい～」などの活用語尾が挙げられる。韓国語も日本語同様、助詞や活用語尾を使う言語だが、もちろんこのような仕組みはすべての言語に共通するものではない。諸言語的に観察される文法カテゴリーであるテンス、アスペクト、モダリティやヴォイスなどは、日本語や韓国語では用言の語幹につけられる形で実現するが、他の言語にはそれぞれ多様な仕組みが存在する。

他にも関係情報の言語化には様々な文法装置が

用いられており、日本語ではあまりなじみがないが、西洋諸語で見られる「一致 (agreement)」を挙げることができる。例えば英語では参与者の数を名詞に「-s/es」をつけて標示したり³⁾、相応する主語の数や人称に合わせて動詞に「-s/es」をつけることが文法的に要求される。

このように、基本的な情報の種類とその言語化の仕方は諸言語的に共通する部分もある一方で、実際にどのような形になるかは個別言語によって異なる。日本語と英語のように系統が完全に異なる言語同士は違いが分かりやすいが、構造的に類似している韓国語と比べると、文法装置やその使い方などの仕組みにおいて多くが共有されている一方で、同じ事柄に対する言語化の仕方やその使用例からは各言語の「らしさ」ともいえる相違が見られる。

4. 日本語と韓国語の違い

集団の間で様々なモノやコトに対するとらえ方は、歴史・文化的に近い場合は共通点も比較的に見出しやすく、日韓はその言語化における仕組みも似ていることはすでに述べたが、同じ形式をとる場合であってもカバーする範囲が微妙にずれることや、そもそも充てる形式が異なる例を探すのは決して難しいことではない。

例えば特定の対象に対して心惹かれる気持ちがあることを日本語では「好き (だ)」という名詞形で表す一方、韓国語は「좋아하다」という語を使うが、これは品詞としては動詞に当たるものである。もちろん日本語でも「好む」という動詞形式がないわけではないが、日常会話の中で好き嫌いを表現するのに用いるのは難しい。「イヌとネコ、どっち派ですか？」に対する答えとして、「ネコの方が好きだ」は日常的によく使うが、「ネコの方を好む」はどことなくぎこちない。

各言語ではまずこのような単語目録のそり方も違うが、さらにそれらを組み合わせる句・節や文などのより大きな単位にする場合は、その分、バリエーションが出る幅も広がることになる。

2) 情態や属性を表す場合は、形容詞になるのが典型的とされる。形容詞は動詞と合わせて「用言」とまとめられる場合もあるが、ここでは議論の便宜上、動詞に焦点を当てる。
3) 日本語の場合、「～たち」をつけてモノの数情報を表すこともあるが、文法的に必須とされる要素ではない。

例えば3.2で述べた、付帯情報をモノとコトのうちどちらに関連づけるかで考えると、「学生が急ぎ足で正門を出る」のバリエーションとしては「急ぎ足の学生が正門を出る」などもありうる。「あわただしい様子」という情報を、コト（「出る」）に紐づけるかモノ（「学生」）に紐づけるか、という選択肢が存在するわけである。さらに趣の違うやり方として「学生が正門を飛び出す」も可能である。この場合「あわただしい様子」は、動きが急であるというニュアンスをもつ「飛び出す」という動詞に組み込まれるわけである。

組み立ての順番もまた様々である。文の基本的な要素（主語、目的語、動詞）がどのような順番で現れるか、また修飾語と被修飾語がどの順番で並ぶかなど、言語化する要素が増えるとバリエーションもそれに合わせて広がる。そして日韓では、以下で紹介するように、似たような状況であっても要素の組み合わせ方が異なることがあり、ときには真逆の選択をすることもある。

具体的な例を見ると、まず上記の「好きだ」と「好む」のどちらを使うかで、その対象となるモノ情報の組み込み方も、それに依拠して分かれる。日本語の場合、「好きだ」に適した形は「ネコが（好きだ）」のようになる一方、韓国語は「ネコを（好む）」のような形で目的語として表現することになる。

- (3) a. 私はネコが好きだ
 b. 私はネコ好きだ
 (4) a. 나는 고양이를 좋아한다.
 私は ネコを 好む
 b. 나는 고양이가 좋다
 私は ネコが いい

また日本語の場合、(3b)のように「ネコ」を

「好き」と合体させて「ネコ好き（ねこずき）」のような複合語にすることも選択肢となる。これは日本語の「好き」が名詞扱いを受けるために可能だが、韓国語だとこの選択肢はない。韓国語で「(ある対象に)心ひかれる」というコト情報を表す形式としては「좋아하다（好む）」以外に「좋다（いい）⁴⁾」もあるが、品詞は形容詞であるため、日本語のような名詞抱合の手段はとれないのである。

さらに、上記の形式に応じて他の付帯情報をどのような形で加えるかが分かれる。例えば(3b)と(4a)に心情の度合いを示す「どのくらい（好きか）」などの情報を加える場合、各形式の文法的要求に従い、日本語は「ネコ好き」という名詞形に合わせて「大の」という名詞修飾形になるが、韓国語は「대단히（とても、すごく）」という程度副詞が動詞を修飾する形をとる。

- (5) a. 私は大の猫好きだ
 b. 나는 고양이를 대단히 좋아한다
 私は 猫を とても 好む

これはいわゆる「連体」か「連用」かに関する問題として知られているが、付帯情報の実現における傾向が日本語と韓国語で分かれることがしばしば観察される。日本語では連体修飾を用いる場面で、韓国語は副詞形などの連用修飾を用いるというわけである。この傾向の違いが顕著に表れるのは、同じ原典に対する翻訳の仕方である。以下は欧米のテレビドラマにつけられた日本語吹替と韓国語字幕⁵⁾だが、オリジナルのセリフに対して両言語の訳はそれぞれ情報の組み込み方が異なることが確認できる。

- (6) a. I need to know what bruises form in the

4) この形容詞は日本語の「いい」に近いが、(3)(4)で想定した場面で使えるかどうかには日韓で微妙に差が出る。日本語では「?うちの家族はみんな猫がいいです」など、同様の場面で用いるのは少し不自然だが、「いい」という形容詞は対象に対する判断の意味が相対的に強く、「?あなたがいいです」（異性への告白として）などのように価値判断抜きに純粋な好意について語るときには概ね使いにくい。
 5) 韓国語例は字幕文であるが、日本語例は字幕文ではなく吹替文を使用している。これはまず、日本語字幕が韓国語字幕に比べて情報量が著しく少ないこと、そして吹替文の方が日常会話により近いことから（尹 2021）、同一の事柄に対する言語化方式の違いを比較するという本稿の目的には、吹替の方がより適していると判断したためである。

next 20 minutes.

- b. 20分後にどんなあざが出たか教えて
 c. 어떤 식으로 멍드는지 보교
 どのように あざが出るか 見て
 문자해줘요
 文字送って

(6a) は「あざが出る」という変化の事柄を中心に、「あざの様子」という情報を知りたがる状況でのセリフだが、(6bc) では日韓ともに「あざが出る」「멍들다 (あざが出る・あざになる)⁶⁾」という動詞形を用いて表現している。一方で、あざの様子を問う疑問詞はそれぞれ「どんな(あざ)」と「어떤 식으로(どのように)」というふうに分かれていて、日本語の場合は「あざ」という名詞を修飾する連体形で、韓国語では動詞を修飾する副詞で実現している。

ただし両言語とも、別の表現形式をとることは可能である。例えば上記の例では、(6b) の代わりに「あざがどのようにに出たか」、(6c) の代わりに「어떤 멍이 드는지(どのようなあざになるか)」などのように連体を連用に、連用を連体に組み替えることができる。日韓語はどちらも連体と連用、両方の仕組みを持っているので、場合によってはこのような交替が容認されるが、連体と連用は常に意味的に一致するわけではなく(奥津2007)、たとえ意味的には変わらなくても、どことなくごちない印象を与えることもある。特にどちらかに使用傾向が偏っていればそのような違和感はより強くなるが、日本語と韓国語の例を観察すると、日本語の場合は連体、韓国語の場合は連用が用いられやすいという一貫した傾向が観察される。

- (7) a. How long do we have?
 b. 残された時間は?
 c. 시간은 얼마나 남았지?
 時間は どの程度 残ったか
 (7) もまた日本語吹替と韓国語字幕を比べたも

のだが、オリジナルのセリフが表現しているのは、病状が急激に悪化した患者の治療にどれくらい的时间的余裕があるのかを問う、という状況である。日本語も韓国語も、際立つ要素としてモノとコトをそれぞれ「時間」「시간」という名詞、「残る」「남다」という動詞を用いて言語化しているが、二つをどのように組み立てるかでは違いが見られる。日本語の場合、「残る」は「残された(時間)」という連体修飾の形をとっているが、韓国語で同じ情報は動詞述語として表現されている。

これはまた、順番の選択においても選好の傾向があることを意味する。「時間」というモノと「残る」というコトの関わりを「残された時間」という「コト+モノ」の順で表しているのが日本語で、「時間が残った」という「モノ+コト」の順で表しているのが韓国語、というわけである。

このように、状況が同じでも日韓の表現形式において組み方や順番の違いが見られることはたびたび指摘されてきたが、その一つに「いい天気(だ)！」のような表現がある。天気よさに気づいた際に、対象(モノ)とその性質(コト)を取り上げて感嘆を示すという機能を果たす言い方で、「いい」という形容詞とその修飾を受ける名詞「天気」のシンプルな構造だが、韓国語でより自然な言い回しは「날씨가 좋다(天気がいい)」という逆の順番になる。

この問題を詳細に分析した生越(2002)では、形容詞(A)と名詞(N)で構成される「A+N」と「N+A」という形式は両言語に存在するが、具体的な使用例では日韓で順番が逆転する場面があることを指摘している。次の(8a)は二人で道を歩いていてかわいい子犬がいることに気づいたときの発話として自然なものだが、同じ構造の韓国語文(8b)の場合、やや違和感のあるものになる。

- (8) a. かわいい子犬(だ)！
 b. ? 참 귀여운 강아지(다)！
 本当にかわいい子犬だ

6) ただし韓国語の方は単一の動詞で、日本語のように句ではない。

(生越 2002)

他にも、複数の要素を言語化する際に日韓であり方が異なる例としてよく知られているのは「複合動詞」で、例えば「駆ける」と「込む」を「駆け込む」というふうに2つの動詞をつなげて1つの動詞にするという仕組みである。「駆け込む」が表すのは単に「駆ける」という動きだけでなく、「どこかに入る」という方向性を持った行為であり、複合動詞はより複雑な事柄、いうなれば複数の要素で構成されたコトを言語化する手段であるといえる。韓国語にも似たような仕組みがあり、「뛰다 (駆ける)」と「들다 (入る、込む)」をつなげて「뛰어들다 (駆け込む)」という動詞を作ることができる。

- (9) a. 駆ける + 込む → 駆け込む
 b. 乗る + 換える → 乗り換える
 (10) a. 뛰다 + 들다 → 뛰어들다
 駆ける + 込む
 b. 갈다 + 타다 → 갈아타다⁷⁾
 換える + 乗る

(9) (10) で示されたように、両方の仕組みは同じように見えるが、日本語の場合、複合動詞には振る舞いの違う2つのグループがあり、「駆け込む」のようなタイプがある一方、「走り続ける」に代表されるタイプがあることが指摘されている⁸⁾。ところが韓国語では「駆け込む」タイプはあっても「走り続ける」タイプは存在せず(塚本2012)、後者の場合は複合動詞で翻訳することはできない。

- (11) a. グラウンドを走り続けた
 b. 答えを書き間違えた
 (12) a. 운동장을 계속 달렸다
 グラウンドを 続けて 走った
 b. 답을 잘못 썼다
 答えを間違えて 書いた

(11) では「走り続ける」タイプを2つ紹介しているが、各例で2つ目の動詞「～続ける」「～間違える」で表される情報は、同じ事柄を表す韓国語文である(12)の場合「계속 (続けて、継続して)」「잘못 (間違えて)」などのように、副詞の形を当てることになるのである。つまり(11)(12)では、コトに関わる何らかの様態という同一の情報が日本語では複合動詞という仕組みを通して動詞の一部として実現しているが、韓国語では動詞を修飾する副詞形として実現していることになるのである。

このように類似した仕組みであっても、情報の性質やその在り方によって適用できる時とできない時があり、その骨組みが異なれば、他の情報の組み込み方もそれに合わせて変わるのである。

5. まとめと今後の課題

以上、事柄を構成する様々な情報が日韓語でどのように言語化されるかに焦点をおいて、その概略を整理した。併せて、言語ごとに存在すると考えられる表現の仕方における「選好」と、それに関わる諸問題を日本語と韓国語という構造的に類似した両言語を対象に考察した。

言語で事柄を表現する際の中心要素である「モノ」と「コト」はそれぞれ「名詞」と「動詞」に言語化するのが典型的とされるが、これが常にすべての言語で共通するわけではない。さらに他にも数々の付帯情報が存在しうるが、それらがどのような形で表現されるか、また各言語でそれを実現する文法的装置にはどのようなものがあるか、これも個別言語によって多様に展開される。さらには、たとえある表現方式が共有されていても、使い方まで同じになるとは限らない。言語化に際してどの要素をより優先し、各言語に備わっている道具立て(「文法」ともいう)の枠内でどれを用いるかなどによって個別言語は同じ事柄に対しても異なる言い回しを充てるのである。

日本語と韓国語でも同一の事柄に対する言語化の方式やそれに関わる文法的手段には違いが見ら

7) 順番としては「変えて乗る」に当たるが、複合動詞によっては組み合わせる順番が日韓で逆になることもある。

8) それぞれ「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」と呼ばれる。詳細については影山(1993)を参照。

れている。本稿で紹介した諸現象で共通的に見られるのは、日本語では名詞や名詞相当の形式を中心にして文を組み立てる傾向が韓国語に比べて強いということであり、それがいわゆる「名詞志向」として発現しているものと考えられる。ここに挙げたものはほんの一部に過ぎず、「名詞志向」と「動詞志向」として経験的に認識されてきた現象は様々な形、レベルにまたがっていると見える。そもそも日本語は韓国語に比べてコトとその関連情報の言語化が抑えられる傾向があるが（尹 2021）、どの情報を言語化するか の優先順位も含め、日韓の言語化方式の違いを示す諸現象に対しては、一定の基準に基づいたさらに詳細な記述が求められる。

これまで日韓の間で主要な論点となってきた現象に「情報の種類とその言語化」という新しい視点を導入し、従来から経験的に認識されてきた違いをより詳細に観察・記述することによって先行研究で指摘されてきた様々な違いに対して統一的な説明を与えることもできると考えられる。

参考文献

Berman, Ruth A. and Dan I. Slobin (eds.) (1994) *Relating events in narrative: A crosslinguistic developmental study*, Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum.

Givón, Talmy (1990) *Syntax: A functional-typological introduction*, vol.II. Amsterdam: John Benjamins.

Givón, Talmy (2016) Nominalization and re-finitization, In: Claudine Chamoreau and Zarina Estrada-Fernández (eds.) *Finiteness and nominalization*, 272-296. Amsterdam: John Benjamins.

Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1985) The iconicity of the universal categories 'noun' and 'verbs'. In: John Haiman (eds.) *Iconicity in syntax*, 151-183. Amsterdam: John Benjamins.

堀江薫 (2009) 「第2章 認知類型論の観点から見た構文の連続性」山梨正明 (編) 『認知言語学のフロンティア5 言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ—』 27-135. 東京：研究社.

池上嘉彦 (1983) 『「する」と「なる」の言語学』 東京：大修館書店.

Ikegami, Yoshihiko (2015) 'Subjective construal' and 'objective construal': A typology of how the speaker of language behaves differently in linguistically encoding a situation. *Journal of Cognitive Linguistics* 1: 1-21.

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 東京：ひつじ書房.

金恩愛 (2003) 「日本語の名詞志向構造 (nominal-oriented structure) と韓国語の動詞志向構造 (verbal-oriented structure)」『朝鮮学報』 188: 1-83.

Lyons, John (1968) *Introduction to theoretical linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.

奥田靖雄 (2015) 「動詞—その一般的な特徴づけ—」『奥田靖雄著作集3言語学編 (2)』 東京：むぎ書房.

奥津敬一郎 (2007) 『連体即連用？日本語の基本構造と諸相』 東京：ひつじ書房.

生越直樹 (2002) 「日本語・朝鮮語における連体修飾表現の使われ方—『きれいな花！』タイプの文を中心に—」『シリーズ言語科学4 対照言語学』 75-98. 東京大学出版会.

Pinker, Steven (2007) *The stuff of thought: Language as a window into human nature*. New York: Penguin Books.

Slobin, Dan I. (2004) *The many ways to search for a frog: Linguistic typology and the expression of motion events*. In: Sven Strömquist and Ludo Verhoeven (eds.) *Relating events in narrative: Typological and contextual perspectives*, 219-257. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum.

Talmy, Leonard (1985) Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. In: Timothy Shopen (eds.) *Language typology and syntactic description III: Grammatical categories and the lexicon*. New York: Cambridge University Press.

Talmy, Leonard (2000) *Towards a cognitive semantics*, vol.2, MA: MIT Press.

塚本秀樹 (2012) 『形態論と統語論の相互作用—日本語と朝鮮語の対照言語学的研究—』 東京：ひつじ書房.

尹盛熙 (2021) 『ことばの「省略」とは何か』 東京：大修館書店.